

マレー語資料のデジタル化と国際連携

坪井祐司

JAMSの連携研究会である「ジャウィ文献と社会」研究会¹では、京都大学地域研究統合情報センターの共同研究と連携し、同センターの所蔵するジャウィ(アラビア文字表記のマレー語)の月刊誌『カラム(Qalam)』の研究を行っている。本稿では、最近の活動を紹介したい。

研究会では、2013年1月5、6日にマラヤ大学にて行われた国際会議「イスラームと多元文化主義」にセッション企画を組む形で参加した。会議は、早稲田大学イスラーム地域研究機構とマラヤ大学アジアヨーロッパ研究所の提携により行われた。会議のテーマは「イスラーム、近代科学、技術」ということで、ハラール産業、建築、環境、出版など2日間で6つのセッションが生まれ、日本、マレーシア、シンガポール、インドネシアなどから約30名の報告者・討論者が参加した。

本研究会のセッションは、「見えない公共圏を解き明かす:『カラム』のデジタル・アーカイブ化」と題して、これまで十分に利用されてこなかったジャウィ資料のデジタル化とその利用に焦点をあてた。司会が山本博之(京都大学)、報告者はジュリアン・ブルドン(京都大学)、國谷徹(上智大学)、筆者(東洋文庫)、モハメド・ファリド(マレーシアイスラーム知識研究所)の四人であった。ブルドンが京大の『カラム』データベースについて報告し、後の三人がデータベースを利用した研究成果を報告した。

また、1月7日には言語出版局(Dewan Bahasa dan Pustaka, DBP)を訪問し、マレー語

資料のデジタル化、データベース化に関する意見交換を行った。

その場では、山本、ブルドンにより京大のマレー・インドネシア語雑誌データベースが紹介され、『カラム』の記事の全文検索が可能なデータベースの構築が進められていること、さらに他のテキストのデータベース(コーランなど)との連結が構想されていることなどが報告された。一方、DBPでもマレー語のマニュスクリプトのデジタル化などの事業が行われているとの紹介を受けた。そして、資料のデジタル化に関して今後も連絡を取り合っていくことを確認した。

研究会では、資料のデータベース化とそれを利用した研究の両面において、国際連携の深化を目指している。地域研究において、資料の共有は重要な課題である。特に、『カラム』のような分量が大きな定期刊行物はデジタル化、データベース化が有力な手掛かりになる。今後も、マレーシアの研究・出版に関わる諸機関と連携して情報の共有に努めるとともに、研究面でも国際的な共同研究を発展させていきたいと考えている。



言語出版局での意見交換風景(2013年1月7日)

¹ 研究会の活動内容および『カラム』の内容については、下記のホームページを参照されたい。
<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/~yama/jawi/>